

□ 次の文章「I」と文章「II」を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章「I」

私が、満年齢まんねんれいでいうと六歳さいの冬の朝（十二月八日！）のことで

す。  
まだ真つ暗なうちに、表の雨戸が開かれる音で目をさますと、土間に入つて来て立っている男の人が、

——ダンナさん、ダンナさん、と父に呼びかけました。

そして話が始まり、※クド場から土間に廻まわった母親が客に差し出しているお盆ぼんの上で、二つのコップと小さな三角山の塩が、電灯に白く光っていました。話し終わつた男の人は、頭をガクンと垂れて大きい呼吸をしました。そして、お盆から取つた塩を左手の甲うらに置くと、ペロリとなめて、①コップをひとつ飲み干ぬしました。そしてもう一度ペロリ、もうひとつのコップ。

しばらくして、私は父が家業の事務をとる部屋に呼ばれました。父は、紙に書いたものを読みなおしているところでした。手紙をとどけるのかと思つたのですが、そうではなくて、父は自分の書いた文章を二度ゆっくり読みあげるのでした。私はそれを覚えて、家の前の通りを川下の方へ歩き、※助役さんのところへ行きました。文房具ぶんぼうぐや※小間物こまものの店でもある、役場につめていられる人の家に行つたわけです。

表の戸を開けてもらい、今度は私がやはり土間に立つたまま、ダンナさん、ダンナさん、と呼びかけて、座敷ざしきに坐すわつていられる助役さんに父親の言葉をつたえました。

太平洋の向こうで、日本とアメリカの戦争が始まつた、大変なことになった、という内容でした。私は覚えた言葉をまちがえないように緊張きんちやうして話し、やはり差し出されたお盆の、もちろんお酒ではなく水のコップで、ドキドキする胸を静めたのでした。

いまは大人も子供たちもこうした大きいニュースを知るのは、テレビかラジオか、または新聞によつてです。いまから六十年前でも、私の家にラジオはありましたし、電話も引いていました。なぜ、あのように川下の町から汗あせまみれで走つて来た男の人が——走まるということだけなら、途中とちゆうで自転車がパンクして、ということだったかも知れませんが、それでも——、わざわざ口頭で私の父にニュースをつたえたのか？ さらに村の別の有力者も、子供の私がそれをつたえに行くまで、②この一大事いちだいじを知らなかったのか？ 不思議なことに思われるのですが……

私の祖母によると、明治維新めいじいしんのすぐ後に農民たちの暴動が始まり——百姓ひやくしやう一揆いっぎといいますが、新政府から私らの地方にさしむけられた、郡長という役人に対して、抗議こうぎするデモといつていいものでした——、行進がすぐこの村まで来ている、とつたえに来たのは、まだ頭にマゲをのせた子供だったそうでした。

③この不思議な出来事は私の心にきざまれました。子供のころはもちろん大学に入っても、それにつながる恐ろしい夢を見たものです。覚えておいて人につたえに行くようにいわれた大切な言葉を忘れてしまふ、という夢……

日ごろの生活でも、あの人がこういった、と他の人につたえねばならない時、私は緊張しました。じつは、いまでもそうです。

しばらく前まで、私は外国の大学での※シンポジウムや会議によく出ました。そこではしばしば、他の人の発言について、それに賛成であれ反対であれ、自分の発言のなかで引用しなければならなくなる場合があります。たいてい発表者の原稿がコピーされて配られています。※アドリブの発言で、よく理解できているかどうか心配な時——私の外国語のヒアリングはあてになりません——私は休み時間に、その当人に自分でノートにとったことを確かめに行きました。

いまその実例を何人も思い出しますが、私の質問に真面目に答えてくれた人たちは、その後手紙をとりかわしたり、別の場所で開かれるシンポジウムへ誘い合ったりすることになりました。

こちらの発言をやはり確かめた上で引用し——賛成、反対ともに——確実な反応をしてくれる人たちに、私は信頼をいただきました。反対に、不正確な引用をした相手には、訂正を求めます。当然に、相手が不愉快な表情をすることもありますが、かえって永い付き合いになった人もいるのが、会議の面白いところでは。

ナイジェリアの劇作家で、アフリカ人としてはじめてノーベル文学賞をもらったウォーレ・ショインカは、じつにすばらしい人間ですが、いまいつてきたようにして友人となったのは、かれも私もまだ三十代前半だった、ハワイの会議でのことでし

た。

シンポジウムや会議でなく、日常の生活のなかの会話でも、私は人の言葉を正確に受けとめて、正確につたえることを心がけています。私の考えでは、それが人間関係のなにより大切な基本です。

「伝言ゲーム」という遊びをしたことがあるでしょう？ 何人かの仲間の、最初の人が発した言葉を次つぎにつたえて行き、最後のひとりまで行ったところで、「伝言」にどのようなズレが生じたかを調べる遊び。

もう子供ではない私は、「伝言ゲーム」に加わる機会がありません。そこで、テレビのヴァラエティーでそれをやると、待ちかまえて見ていました。しばらく前、それがレギュラーの演目になっている番組があったのです。

私がどうしてそれほど興味を持ったかというところ、「伝言ゲーム」をする人たちの答え方に——とくに、前の人に聞いたことを次へつたえる際の、まちがいの仕方ですが——、分類できる特徴があったからです。

- 1、

A
---
- 2、

B
---

3、やはり話を作るけれど、自分が面白い、と思う方向に作りかえる人。

1の人は仕方がありません。ただ、子供の場合、ふだんから注意深く人の話を聞いて、その人がなにをいいたかったかをよく考えながらつたえようとすれば、ずっと正確になれるでしょう。

う。若いお母さんなら、お子さんの正確な伝達力を伸ばすことをねがって、会話に注意深くすることです。そうするうち、お子さんのというより、自分のまちがった聞きとりに気がつかれることもあるのじゃないでしょうか？

2の人は、観察する気になるとすぐわかりますが、じつに多いのです。あまり責任のない会話を、自由に楽しむ環境では——家族や友達との、のんびりした会話など——もしかしたらそうした話のつたえ方こそ普通だ、といたいほどです。

私たちがふだんの生活で人と話をする時、じつは、大切な用件があつてということはありません。学校の先生のように、毎日、子供たちに正しい情報や知識をつたえようと話をされる場合、それはそのように身がまえてということで、普通の話し方とはちがいます。

そして、先生方も、仲間同士では、気楽な冗談をいったりして、肩のこらない気分を盛りあげていられるはずで、

そのためには、「真実」をつたえるという目的より、話を聞いている人と共通の「気分」を作り出す目的が重んじられると思います。

ところがこうした場合にも、その仲間の外側にいる人にとっては、自分のいった言葉が、つたえ手の仲間うちでねじ曲げられていることで傷つく、ということがしばしばあります。

※ こういう雰囲気の話し合いのなかで、話を面白くするための誇張や、※ 脚色をする——ウソとまではいいませんが、物語のように面白くする——人がいると、

——いや、そうではないのじゃない？ と軽快な感じで話を

さえぎり、つたえられる情報のズレをなおす人がいます。

公平さへの勇気があつて、話もうまい人がそういう役割をたす時、気持のいいものです。人のする面白い話には、絶対に疑いを表す人もいて、この場合、その人の性格の狭さに問題がある、という気もしますが……

( 中略 )

文章を書くということは、自分の心のなかに湧き起るものを書くのだ、と考えていられる人は多いでしょう。しかし、私たちは自分の目で見たことを書くのだし——それに反対される人は少ないはず——、そのことをよく考えれば、私たちは自分の耳で聞いたことを書く、と続けても賛成してくださるのではないのでしょうか？

私たちの④ 本当の知恵は、自分の目で見ること——本を読むことも、そこに入れましょう——、自分の耳で聞くことをよく受けとめ、自分のものとして活用することができるようになって、生まれるのです。

私たちは自分の頭で考えるのですが、ひとりで考える時、問題がこんぐらがって、すっきりした答えがでない時、自分のなかに、自分とは別の人物をひとりか二人作り出して——または、実際にいる人物をそこに呼び入れるようにして——そのメモバールの対話として考えてみることは、整理したり深めたりする上で有益です。

これまでも例にあげましたが、プラトンの『メノン』やガリレオ・ガリレイの『新科学対話』は、そのようにして人間が

考えるやり方のすばらしい見本です。

そして、このように考える仕組みで大切なのは、自分より他の人間がなにを、どのように話すかを、しっかりと聞きとる注意深さなのです。

他の人のいうことによく耳をすまし、注意深く受けとめることができようになれば、自分が本当にいわなければならぬことを確実にまとめられることもできます。他の人のいうことに耳をかさないで、ただ自分の意見だけを言いたてることの、弱さも自覚されます。そこから、忍耐強く他の人を説得する力が生まれてきます。

そこで、私は、本を読んでの自分としてのまとめや、実際に他の人から聞いたことの、その人の話しぶりも生かしての内容を、自分の文章として書いてみることをすすめたいのです。

( 大江健三郎 『「新しい人」の方へ』 )

※ (文中のことばの意味)

クド場 …… 昔の台所。

助役 …… 市長・村長に次ぐ地位の人。

小間物 …… こまごましたもの。

シンポジウム …… 特定の問題について、何人かが意見を述べ、質疑応答を行う形式の討論会。

アドリブ …… その場で考えたセリフや言葉。

誇張 …… 実際より大きさに言うこと。

脚色 …… 事実を面白く伝えるために飾ること。

問1 ———— 線① 「コップをひとつ飲み干しました」とありますが、そのような行為をしたのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 緊張でどきどきする胸を静めるため。  
イ せっかく出されたものを飲み残すのは失礼なため。  
ウ 走ってきたのでのどが渴ききつていたため。  
エ なめた塩がしょっぱくてのどが渴いたため。

問2 ———— 線② 「この一大事」とありますが、どのようなことですか。「くこと」につながるように、文中から十五字でぬき出しなさい。

問3 ———— 線③ 「この不思議な出来事は私の心にきざまれました」とありますが、「不思議」だといえるのはなぜですか。文中のことばを使って、五十字以内で説明しなさい。句読点なども字数に数えます。

問3 ———— 線③ 「この不思議な出来事は私の心にきざまれました」とありますが、「不思議」だといえるのはなぜですか。文中のことばを使って、五十字以内で説明しなさい。句読点なども字数に数えます。

問4 文中の 

A
---

 と 

B
---

 にあてはまる文

として、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア とにかく早くつたえようとして、まちがえてもかまわな  
いと思いつたええる人。

イ これから話をつたえる人に面白がってもらおうとする気  
持が強く、聞いたことをつい作りかえる人。

ウ 人のいうことに疑問を持つと常識にあてはめ、訂正して  
つたえる人。

エ 不注意で、しかも軽はずみなところがあつて、単純なま  
ちがいを繰り返す人。

問5 ———— 線④「本当の知恵」とありますが、どのような力

ですか。文中のことばを使って、七十字以内で説明しなさい。句読点なども字数に数えます。

問題は次のページに続きます。

[Ⅱ]については著作権上の関係で公開しておりません